

平成 31 年 4 月 24 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K00720

研究課題名(和文) 日本における乳幼児期のESD - 地域で育つ・地域を創る保育・教育モデルの検討 -

研究課題名(英文) Early childhood ESD in Japan -Examination of a childcare and education model to grow up in the area and create the area-

研究代表者

富田 久枝 (TOMITA, Hisae)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90352658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本の乳幼児教育における「持続可能な開発のための教育：ESD」の社会・教育的意義と、その教育効果を明らかにすることを第一の目的とした。その結果、特に日本におけるこれまでの保育の中に、ESDで目指す保育内容が既に内包されていることが明らかになった。また、収集した実践事例から日本型ESD保育・教育モデルの検証を行い、その結果、日本の保育は地域の文化の影響を強く受けて独自の発展をしていることも明らかとなった。しかし、その中心的な構造やエッセンスは共通しており、研究開始時に作成したモデルの妥当性が検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を始める契機となったのが、日本を震撼させた3.11東日本大震災で目のあたりにした、地域の崩壊と人との繋がりの大切さであった。そして、日本の復興のために、教育による積極的な取り組みが必要と考え、乳幼児期からの持続可能な教育の推進を目指した。そして、本研究がスタートし、様々な地域における個性的で伝統的な文化を背景に子どもたちが育てられ、日本の保育そのものに、既にESDが内包されていることが確認され、日本の保育の質の高さを本研究で検証することができたことは有益であり意義あると考える。さらに、平成30年に告示された幼稚園教育要領等にも同じ意味の内容が多く取り上げられ保育現場への貢献も大きかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is ESD (Education for Sustainable Development) in early childhood education in Japan. Its primary purpose is to clarify its social and educational significance and its educational effects. As a result, especially it became clear that childcare contents aimed at ESD were already included in childcare in Japan so far. In addition, it was the verification of the Japanese-style ESD childcare and education model from the collected practice cases. As a result, it became clear that Japan's childcare is strongly influenced by the local culture and developing independently. However, its central structure and essence are common, and the validity of the model created at the beginning of the study was verified.

研究分野：乳幼児教育学

キーワード：ESD 保育 子育て 継承 創造 環境 乳幼児

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の社会・学術的背景

先ず、本研究では **ESD** (持続可能な開発のための教育: **Education for Sustainable Development**) に関わる世界的な動向から本研究の背景を検討してきた。**ESD** は **1987** 年、国連の「環境と開発に関する世界委員会」において **SD** (持続可能な開発: **Sustainable Development**) について「将来世代が彼らのニーズを満たすための能力を損なうことなく、現在世代のニーズを満たすこと」が定義されたことに始まる。その後、**1992** 年に開催された世界サミットでオーストラリアの少女の「誰もが永遠に足るように: **enough for everyone forever**」が世界的な反響を呼び、**SD** の考え方が世界中に広まった。この気運の高まりから包括的に **SD** を推進するための教育として、国連を中心に **ESD** が世界各国で推進されるに至った。国連の関連団体 (**NGO**) である **OMEP** (世界幼児教育・保育機構) においても世界総会・大会でその重要性が確認され、中心的な研究テーマ・活動目標として推進されている。日本においても、地域における人的・物的環境と人のつながりの中で育まれる地域文化を教育に取り入れる教育・保育の在り方が検討されるようになった (**2014**、富田他)。

(2) 本研究の日本国内における背景

本研究を企画する最も大きなきっかけは、日本中を震撼させた **3.11** 東日本大震災であった。この未曾有の災害は、北は北海道から南は関東近縁まで広範囲に甚大な被害をもたらし、一瞬にして「地域崩壊」「家族離散・喪失」といった危機を招いた。この経験を通して研究代表者は地域という人の生きる場所、生活の拠点、教育の根本が人の人生に大きく関与し、その後の人生までも左右する大きな役割を有していることに改めて気づかされたことに端を発する。

そのような事態の中で現代の日本の子育ては核家族化が進み、地域の子育て家族を繋ぎ支援を担う役割として保育現場が期待され、多くの研究の中で議論されている。また、保幼小の接続と連携という教育の課題も、地域における人的・物的資源の有機的な活用と、それぞれの機関と家族との交流がその成果に大きくかかわることも明らかにされている。今の日本の家族は、地域の中で生きる意味も見いだせずに途方に暮れている現状がある。上記のような世界的な動向に加え、日本の地域再生、地域による教育の必要性を痛切に感じ、本研究に着手した。

2. 研究の目的

(1) 本研究では日本の乳幼児教育における「持続可能な開発のための教育: **ESD (Education for Sustainable Development)**」の社会・教育的意義とその教育効果を明らかにすることを第一の目的とする。具体的には日本の各地で先駆的に実践されている事例を収集し、その特徴や教育効果を検討することを目的とした。

(2) 本研究の第二の目的は、収集された各地域で先駆的に実践されている **ESD** による保育・教育実践から **ESD** による保育・教育の基本的な共通の基本的な枠組みや構造を検証し、図 1 で示した「日本型 **ESD** による保育・教育モデル」の基礎をつくることである。

3. 研究の方法

(1) 文献による検討

OMEP が発行している研究雑誌、保育学研究、教育心理学研究、乳幼児教育学研究、発達心理学研究などの学術的な雑誌から **ESD** に関わる論文を研究分担者とともに講読して、教育モデルの骨子となる概念、キーワード等を検討する。

(2) 質問紙やインタビュー (面接) 等による情報収集

日本各地で特徴的な **ESD** に関わる保育・教育実践を視察、観察、半構造化面接等で得られたデータを、それぞれの特徴と事例間の特徴から質的に分析する。

(3) 主な研究スケジュール

主な研究スケジュールは表 1 に示してある。平成 **30** 年度については

研究期間を延長したため、表 1 には内容が示されていない。主な計画としては平成 **27** 年～**29** 年までの **3** 年間の計画の中で達成できなかった課題を、平成 **30** 年度のスケジュールとした。具体的には「モデルの構築」に関する研究、アクション・リサーチによるモデルの修整とスタンダードモデルの構築検証を実施することとした。

表 1 研究当初の主な研究スケジュール

	主な研究内容	27年	28年	29年
基礎研究	○保育現場の実践事例収集	→		
	○先駆的事例の質的分析・検討			→
	○国内の研究動向のまとめ	→		
	○海外の研究動向のまとめ			→
	○文献・資料の収集と総括	→		
モデル構築	○地域の人的・物的環境の概念整理	→		
	○保育内容や構成・構造表すをキーワード抽出・整理		→	
	○保育実践モデル試案の作成	→		
	○アクション・リサーチによるモデルの修正		→	
	○保育実践スタンダードモデルの構築と実践		→	

4. 研究成果

(1) 文献による検討

日本の保育関連の文献では、当初、**ESD** について検討した研究はほとんど見当たらなかった。唯一関連する分野としては、当時、日本で注目されていた「森の幼稚園」といった環境教育の分野であった。その流れからフィンランドの保育「ネウボラ」やドイツやデンマークの「森の幼稚園」をモデルにした日本の保育実践の研究が散見され、広くとらえれば **ESD** に関連する研究が進み始めていることが確認できた。

一方で、ユネスコを中心とした **ESD** の取り組みである「ユネスコスクール」が環境教育の一環として、主に小学校を中心に日本の各地で取り入れられ進められるようになった。その集大成として「持続可能な開発のための教育 10 年」の最終年 **2014** 年にユネスコと日本政府の共催により愛知県名古屋市と岡山県岡山市で「ユネスコ世界会議」が開催されたことは日本における **ESD** という教育アプローチを定着させる機会となった。しかし、参加した団体は幼稚園が **1** 園だけであり、乳幼児教育における **ESD** の推進は途上で有ることも確認された。

また、今回の研究期間内で日本の保育は「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」等が平成 **30** 年から実施されたことを契機として、そこで示された内容に関して **ESD** との接点を吟味し、日本の保育における **ESD** の位置づけを検討した。その結果、幼児教育・保育と **ESD** には類似性が有ることが確認された。

先ず **1** つ目は今と未来を同時に捉えるという視点である。「幼児期は自然な生活の流れの中で直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎を培う時期である」(幼稚園教育要領解説(平成 **30** 年 **2** 月) 序章第 **2** 節 **2** 幼稚園の生活) とあるように、幼児教育・保育は「今、ここでの生活」の充実と「将来の姿を見通した発達の保障(未来の充実)」という対象への援助に二重性を持つ営みである。この二重性が **ESD** の考え方にも存在する。それは「将来世代が彼らのニーズを満たすための能力を損なうことなく、現在世代のニーズを満たすこと」(国連ブルントラント委員会：環境と開発に関する世界委員会 **1987** 年) と定義された概念であり **ESD** では、その対象となる子どもたちは自分の今の生活だけでなく、未来を自分だけでなく周りの人々(生き物たち)のことを考えて行動することを求めている点で、類似していることが本研究で検証できた。

加えて、この幼稚園教育要領等の改訂により、さらに重視された視点、「環境を通して行う保育」に係る内容においても「幼児期にふさわしい生活の展開」と「遊びを通しての総合的な活動」を丁寧に捉えており、このことは **ESD** における学びの基本と重なっていることも確認できた。また、領域「環境」においても「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」という項目が新設された。遊びや行事等の活動を通して、持続可能な社会の構築の前提となる伝承すべき地域の特性として文化や伝統との関りの重要性を明文化した点も **ESD** との関連の深さが理解できた。

(2) 先駆事例からの検討

○地域の子育て支援を支える

中谷ら(**2014**)は地域による子育て支援事業の支援者と母親が持っているエンパワメントを活用した支援の効果を検討している。この研究が示唆しているように、現代社会の子育ては地域の様々な資源(人、モノ)をフルに活用することが効果的と考えることができる。

その **1** つである地域の先輩ママ達が子育て世代を支援するファミリーサポート事業は、本研究で調査を実施した。

その結果、地域特有の文化や地域の遊具を活かした実践が多くみられ、日本の子育ての中には既に **ESD** は内包されていることが検証された。

○木育(埼玉県)と子どもの育ち・教育

地域の事例として本研究では埼玉県の「木育」という取り組みに着目してきた。戦後、各地で木材の需給の高まりと共に植栽事業が盛んに行われたが、近年になり里山も衰退している。しかし、伐採の時期を迎えたスギ、ヒノキ材の伐採とその活用という課題から治山事業と補助事業の必要性が生じた。その流れのなかで子どもたちの教育に県の産業である木材を積極的に活用する取り組みとして、埼玉県では木育推進活動を開始した。この事業はどのような教育効果を持つものなのかといった問いを、本研究では着目して検討してきた。

その結果、地域の産業と保育の関りは重要な枠組みであり、「人が育つという営み」は地域から大きな影響を受けていることが明らかとなった。乳幼児期の子どもは「ごっこ遊び」が大好

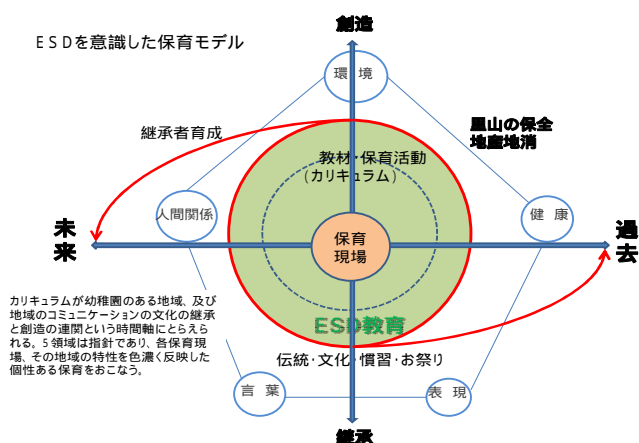


図1 ESDを意識した日本の教育・保育モデル

きである。この遊びは大人が教えなくとも、いつの間にか自分の家族（お父さんやお母さんの真似）から始まり地域のお店の様子、地域の消防、警察といったインフラで活躍する人々を将来のモデルとして模倣する学びが始まることは周知のことである。このような遊びへの地域の教育的な効果という視点から地域の産業を捉えなおすと、子どもの成長には欠かせないファクターであることが改めて本研究で検証できた。

亀山（2012）は稲作という視点から地域の産業でもあり地域の資源でもある生活を幼稚園の活動の中に組み込むことの意義を明らかにしているが、本研究でも同じような効果を検証することができた。

○自然と関わる保育実践

富田ら（2014）は地域の資源を活用し、その資源を用いて子育てを推進することの意義を述べている。特に兵庫県の里山での実践は、地域に根差した自然を積極的に活用することで子どもたちが豊かに育つ保育の本質を検証している。そこで、本研究では兵庫県の実践を参考に図1で示した「ESDを意識した日本の教育・保育モデル」に示されているキーワードや関係性を念頭に入れながら、日本各地でその地域特有の自然環境を活かした事例を収集して、その特徴の検討を行った。

その結果、沖縄市名護市 S 保育園、愛媛県伊予郡 A 幼稚園、広島県広島市 C 幼稚園、熊本県玉名市 T 幼稚園など多くの保育現場の実践では、地域特有の自然環境をそれぞれの保育現場の保育者と地域の人々や保護者が協力して、子どもたちの育ちを支えていた。そこで、地域の環境がどのような場面で重要な環境として機能し、さらにはその地域の文化や伝統を伝える場としてもどのように機能しているのかという視点から事例の検討を行った。

その結果、収集した保育実践の事例では、地域の環境の特徴（文化や伝統についても）を子どもたちや保護者に丁寧に伝え（継承）これまでの活用から子どもや保護者の新しい発想をフルに活かして環境を新たに創っていく（創造）という「過去から現在・現在から過去への連環的な営みが繋がれている」ということが検証された。日本の保育の中に「継承」と「創造」というESDの視点は十分に踏襲され長い歴史の中で内包され守られてきていることが分かった。

○文化・伝統と共に育つ

地域の文化や伝統を保育の中心の概念に据えたニュージーランドの統一カリキュラム「テ・ファリキ」による実践は飯野（2014）の研究や七木田（2015）の研究により、近年は多くの保育現場でもその内容や方法に興味や関心が集まっている。本研究においても、これらの研究から「日本の保育を振り返りESDの枠組みから保育の在り方を問い直す」という大きな問いを得ることができた。マオリという先住民族との融和に重きを置き、統一カリキュラムの名称にマオリ語を用いるといった特徴的な取り組みである。しかし、日本においても古い伝統や文化をまるでタイムスリップしたような保育環境を維持し、今も明治時代から変わらぬ保育をしている長野県上田市にある梅花幼稚園についてインタビュー調査を実施し、ESDとの関連を検討した。その結果、梅花幼稚園で実践されている保育（伝統や文化に関わる）は明治時代から現代まで「保育の土台・根本」として今も息づいていることが分かり、日本の保育には伝統や文化を継承しそれを土台に新しい保育を創造しながら活かしている実態が検証できた。

(3) アクション・リサーチによる検討（千葉大学教育学部附属幼稚園において）

本研究では研究代表者が千葉大学という環境下であり、附属幼稚園との交流の中で本研究に協力を得た。具体的にはニュージーランドで実践されている保育の記録（ラーニングストーリー）の日本版を試みて、子どもたちの遊びの中の実態を可視化した記録として保育室に定期的に掲示し、保育者同士、子ども同士、保護者と子ども、子どもと保育者という人間関係を介在してどのように伝えられ発展していったのかを、記録から読み解いていった。ESDの視点から保育を記録し、その記録を可視化（ポスターのようにして保育室に定期的に掲示）することで、現在と未来と過去を子どもたちは行き来しながら学び成長していったことが観察の記録により明らかになった。附属幼稚園とのアクション・リサーチにおいても図1で示したモデルが検証できた。

<引用文献>

七木田 敦、ジュディス ダンカン、「子育て支援の先進国」ニュージーランドの保育 歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育、福村出版、2015

中谷 奈津子、地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化 支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して、保育学研究、52巻3号、2014

飯野 祐樹、ニュージーランド就学前統一カリキュラム Te Whariki（テ・ファリキ）の作成過程に関する研究 関係者へのインタビュー調査を通して、保育学研究、52巻1号、2014、90-104

富田 久枝、上垣 内伸子、片山 知子、吉川 はる奈、田爪 宏二、名須 川知子、鈴木 裕子、藤原 輝美、西脇 二葉、地域で育つ・地域を創る『乳幼児期におけるESD』 日本の保育における継承と創造を目指して、千葉大学教育学部研究紀要、第62巻、2014、155-162

亀山 秀郎、幼稚園における稲作の意義の検討 KJ 法による保育記録の分析を通して、保育学研究、52巻1号、2012、40-52

文部科学省、日本ユネスコ国内委員会ホームページ（<http://www.mext.go.jp/unesco>）

文部科学省、幼稚園教育要領、2017告示、2018開始

文部科学省、幼稚園教育要領解説、**2018**

厚生労働省、保育所保育指針、**2017** 告示、**2018** 開始

内閣府、文部科学省、厚生労働省、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、**2018**

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 9 件)

富田 久枝、土田 俊弥、馬介 在学習における学びのプロセス 小学校 5 年生女子の学びの記録に着目して、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 67 巻、**2019**、**75-80**

富田 久枝、入江 一葉、幼児同士のからかいにおける受け手の心情 反応の特徴に着目して、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 67 巻、**2019**、**81-88**

富田 久枝、根本 咲那、インクルーシブ保育に対する保育者の意識 保育者効力感・人権意識に着目して、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、**2019**、**89-96**

富田 久枝、中上 日登美、保育所 1 歳児クラスの給食場面における子どもと保育者の相互交渉、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 66 巻第 2 号、**2018**、**107-112**

岡部 裕美、七澤 朱美、富田 久枝、科目横断によるミュージカルの指導公演の教育的効果 音楽と身体表現を引き出す授業の取り組み、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 66 巻第 1 号、**2017**、**191-198**

富田 久枝、浜田 彩、乳幼児の絵本の選択傾向、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 66 巻第 1 号 **2017**、**9-18**

富田 久枝、睦 蓮淑、中国延辺地区の留守家族が子どもの学校適応に及ぼす影響について 児童期・思春期の愛着(安心感・親密性)に着目して、千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 65 巻、**2017**、**105-112**

富田 久枝、発達障害児・者に対するかかわり、日本カウンセリング学会認定カウンセラー会カウンセリングワールド、査読無し、第 4 号、**2017**、**10-11**

富田 久枝、岡田 あずさ、障害当事者とその親の成長に伴う心情 先天性色覚異常者とその親の質的検討 千葉大学教育学部研究紀要、査読無し、第 63 巻、**2015** 年、**51-56**

[学会発表](計 16 件)

劉 奕君、奥谷 佳子、砂上 史子、松寄 洋子、富田 久枝、4 歳児の共同意思決定場面における行動 自由遊びにおける表現リズム遊び「曲かけ」場面に着目して、日本保育学会第 71 回大会、**2018**

大内 晶子、倉住 友恵、富田 久枝、鈴木 公基、櫻井 茂男、母親を取り巻く子育て環境が母親の育児感情および養育行動に与える影響、日本教育心理学会第 60 回総会、**2018**

倉住 恵子、大内 晶子、鈴木 公基、富田 久枝、櫻井 茂男、母親の育児感情および養育行動が子どもの学習動機づけ・成績に及ぼす影響、日本教育心理学会第 60 回総会、**2018**

富田 久枝、名須川 知子、上垣内 伸子、片山 知子、西脇 二葉、田爪 宏二、吉川 はる奈、乳幼児期の ESD を実践するために 私たちは ESD で何を伝えようとしているのか 日本保育学会第 70 回大会、**2017**

笠井 敬祐、原田 友毛子、武田 美和子、小池 良江、伊藤 益子、富田 久枝、教育カウンセリングの知見や手法を用いた育児・保育支援を考えるパート、第 15 回日本教育カウンセリング学会研究発表大会(兵庫大会)、**2017**

奥谷 佳子、大道 香織、斎藤 晶海、富田 久枝、松寄 洋子、砂上 史子、幼児はキャベツをどのように分けるか 幼稚園の飼育当番活動における 5 歳児の分配行動と意識、日本保育学会第 70 回大会、**2017**

富田 久枝、子どもの口頭詩とアセスメント、OMEP 世界大会(クロアチア)招待講演、**2017**

富田 久枝、田爪 宏二、片山 知子、西脇 二葉、大庭 三枝、吉川 はる奈、名須川 知子、保育実践を豊かにする ESD の展開と可能性の探求、日本保育学会第 65 回大会、**2016**

富田 久枝、栗原 ひとみ、原田 友毛子、教育カウンセリングの知見や手法を用いた育児・保育支援を考える、日本教育カウンセリング学会第 13 回大会、**2016**

富田 久枝、睦 蓮淑、中国延辺地区の留守家族が子どもの学校適応に及ぼす影響について 児童期・思春期の愛着(安心感・親密性)親からの検討、日本教育心理学会、**2016**

富田 久枝、栗原 ひとみ、原田 友毛子、水畑 久美子、山下 みどり、教育カウンセリングの知見や手法を用いた育児・保育支援を考えるパート、日本教育カウンセリング学会第 12 回大会、**2015**

富田 久枝、吉川 はる奈、片山 知子、名須川 知子、上垣内 伸子、西脇 二葉、乳幼児教育における ESD 幼児教育実践史をめぐって、日本乳幼児教育学会第 24 回大会、**2015**

富田 久枝、母親の自主運営型保育プレイセンターの日本の保育における意義、日本保育学会第 68 回大会、**2015**

北田 沙也加、岡田 あずさ、倉持 早希子、睦 蓮淑、山田 千愛、中 澤潤、富田 久枝、自由遊びにおける保育者の去りと子どもの行動、日本保育学会第 68 回大会、**2015**

溝邊 和成、富田 久枝、ニュージーランドに見られる小さな森の中の幼稚園、日本保育学会第 68 回大会、**2015**

富田 久枝、上垣内 伸子、片山 知子、西脇 二葉、萩原 元昭、藤井 修、名須川 知子、金田 利子、田爪 宏二、地域をつなぐ・地域を創る 乳幼児期の ESD の課題と展望、日本保育学会第 68 回大会、2015

〔図書〕(計 10 件)

富田 久枝、上垣内 伸子、田爪 宏二、吉川 はる奈、片山 知子、西脇 二葉、名須川 知子、かもがわ出版、持続可能な社会をつくる日本の保育 乳幼児期における ESD、2018、115
名須川 知子、大方 美香、鈴木 裕子、富田久枝(分担)他、ミネルヴァ書房、保育内容総論 -乳幼児の生活文化 (MINERUVA はじめて学ぶ保育<5>、2018、219 (担当 140-159)
富田 久枝、ぎょうせい、新教育課程ライブラリー、保育カウンセリングの現場から見える乳幼児期の子どもたち、2017、95
富田 久枝・松浦俊弥編著他、北樹出版、ライフステージの発達障害論インクルーシブ教育と支援の実際、2016、263
富田 久枝、金子書房、児童心理、こだわりの強いこととの関係づくり、2016、128 (担当 108-112)
富田 久枝、金子書房、児童心理、負けず嫌いは育てられるか、2016、128 (担当 19-25)
田爪宏二、富田 久枝他、あいり出版、保育の心理学「保育観とは：保育とは何かを問う」2016、279(担当 20-25)
諸富祥彦、富田 久枝編著他、ぎょうせい、保育現場で使えるカウンセリング・テクニク子どもの保育・発達支援、2015、165
諸富祥彦、富田久 枝編著他、ぎょうせい、保育現場で使えるカウンセリング・テクニク保護者支援・先生のチームワーク、2015、189
富田 久枝監修、成美堂、DVD つき たのしいあやとり、2015、95

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

- 研究分担者氏名：名須川 知子
ローマ字氏名：(NASUKAWA tomoko)
所属研究機関名：兵庫教育大学
部局名：学校教育研究科
職名：理事・副学長
研究者番号：50144621
- 研究分担者氏名：片山 知子
ローマ字氏名：(KATAYAMA tomoko)
所属研究機関名：和泉短期大学
部局名：児童福祉学科
職名：准教授
研究者番号：50588506
- 研究分担者氏名：吉川 はる奈
ローマ字氏名：(YOSHIKAWA haruna)
所属研究機関名：埼玉大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号：70272739
- 研究分担者氏名：上垣内 伸子
ローマ字氏名：(KAMIGAICHI nobuko)
所属研究機関名：十文字学園女子大学
部局名：人間生活学部
職名：教授
研究者番号：90185984
- 研究分担者氏名：西脇 二葉
ローマ字氏名：NISHIWAKI futaba
所属研究機関名：東京福祉大学
部局名：保育児童学部
職名：講師
研究者番号：30389803

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。